

一滴も酒を呑まなかつた長頸子君は、ほろ酔ひの私の前でシトロンやコーヒを啜り乍ら気の置けない、ほんとの呑友達と云つた様な話し合手になつて居て呉れた。時にはつひひそんな事に増長して遊びの話など持掛けて見た。然し長頸子君は、親の世話になつてゐる内は、たとへ余つた金があつても僕にはどうしてもそこまでの勇氣は出ない。第一濟まん事だ、と真面目になつて云つた。私は少しばかり酒をなめる自分と、そうした話などを持出した事を恥しく思つた。

その頃早稲田の英文科に席を置いては居たが、学校へ出る日よりも欠席の日が多かつた。その事に就て水巴先生から何だつたか面白い皮肉を云はれた事があつたので皆なで笑つた。長頸子君も苦笑した。それ程学校の方は至つて不熱心であつた。その変りその時分からめきくと天分の芸術が光り出して来た。余り多くは発表する事を嫌つてゐたが、それでも二、三の雑誌にはずば抜けた良い作品が発表される様になつた。

私の得意先きに××少年社と云ふ雑誌社があつた。是非長頸子君に来てもらひ度いとも云ふので紹介してやつた。そこでは非常に優待されて、編集から多くの執筆までほとんど主要な部分を受持つてゐた。毎号の童謡や少年小説にも、どんなに幼きな読者に慕はれた事だつたらふ。

間もなく此の雑誌の経営一切を引受けて社長海野厚一の活字が雑誌に現はれた時私は心から喜んでやつた。然しそれは束の間だつた。あの気性で、まして小供の雑誌の経営は同君としてその任でなかつたのも無理でない。世の中に出て第一番の事業？に不幸にも失敗の憂目を見た事は、たしかに物質的以上心の痛手に堪え得る事が出来なかつたらう。瓢然と旅に出てしまつた。誰れにも云はずに、何処

となしに旅を続けた最後に修善寺へやつと落付いた。たまさかそこから呉れる手紙はどれも淋しいものであつた。

約一年間を旅に暮して又瓢然と東京へ復つて来た。其処はいつか戻つて来る兄の為に烏喙子君の定めて置いた、即ち今の行人坂下の家であつた。

一年目に戻つて来た我が家、と云つてもそれは住み馴れた我が家ではない。懐かしい弟の手紙の端の番地をたどりながら、淋しい郊外の夜を探し廻つたのである。暗い影の付きまといつてゐる事も知らず行人坂下を探し廻つたのである。
(曲水10-9)

麴町より

水 巴

(一)

七月十八日の朝、都新聞の頁を繰ると、四段抜の写真版が派手やかに私の眼に映りました。それには、何かしらん怪物の一部分が横たはつて、其れを一人の若い西洋人がニコヤカに眺めて居ます。傍らの楕円形の輪廓の内にも一人の老いたる西洋人が立つて居ます。

記事を読んでみますと、「日本滞在一年有半にして突然巴里へ転任を命ぜられた米国費府パブリック・レツジャー紙の極東通信員ノール氏は、曾て巴里に駐在中親しくしてゐたクレマンソー翁が日本の外交官から贈られた鯉幟を邸宅の空に掲げて、悠々天にひるがへる雄姿を仰いで会心の笑みを洩らしてゐたが、漸く年月と共に其色の褪せて行くのを淋しがつた。で、その事を想ひ出して、八十余才のク翁へ八間余の鯉幟をお土産にするのである」といふ意味です。私は、面白いなアと思ひました。そしてふと、古い「曲水」大正